

Hilbert 空間 H は、以下すべて可分無限次元とする。 $B(H)$ で、 H 上の有界線型作用素全体を表す。作用素環を表すのに、 M, N, R, P, Q, \dots などの文字を、作用素を表すのに、 $x, y, z, t, s, a, b, \dots$ などの文字を、Hilbert 空間の vector を表すのに、 ξ, η, ζ, \dots などの文字を用いる。 H の内積は、 (ξ, η) と書き、作用素 x の conjugate x^* は $(x\xi, \eta) = (\xi, x^*\eta)$ で定められる。このとき、 $\|x^*x\| = \|x\|^2$ が成り立つ。

[1] $B(H)$ 上に、以下の 5 つの位相を入れる。以下、 (x_i) は net である。

- (1) norm topology
- (2) strong operator topology: $x_i \rightarrow x \iff \|x_i\xi - x\xi\| \rightarrow 0 \quad \forall \xi \in H.$
- (3) weak operator topology: $x_i \rightarrow x \iff |(x_i\xi, \eta) - (x\xi, \eta)| \rightarrow 0 \quad \forall \xi, \eta \in H.$
- (4) σ -strong operator topology: $x_i \rightarrow x \iff \sum_{j=1}^{\infty} \|x_i\xi_j - x\xi_j\|^2 \rightarrow 0$
 $\forall \xi_j \in H$ with $\sum_{j=1}^{\infty} \|\xi_j\|^2 < \infty.$
- (5) σ -weak operator topology: $x_i \rightarrow x \iff |\sum_{j=1}^{\infty} (x_i\xi_j, \eta_j) - (x\xi_j, \eta_j)| \rightarrow 0$
 $\forall \xi_j, \eta_j \in H$ with $\sum_{j=1}^{\infty} \|\xi_j\|^2 < \infty, \sum_{j=1}^{\infty} \|\eta_j\|^2 < \infty.$

σ -strong (weak) operator topology は、ultrastrong (ultraweak) operator topology とも呼ばれる。また、“operator” は、しばしば省略する。(Banach 空間としての強位相、弱位相と混同しないこと。) Norm topology が一番強い位相である。 $B(H)$ の (norm に関する) 単位球上では、 σ -strong operator topology と strong operator topology, σ -weak operator topology と weak operator topology とは同じである。([T1] Chapter II, Section 2, [UHO] 4.1.)

[2] (von Neumann の double commutant theorem) $B(H)$ の 1 を含む*-部分環 M に対し、以下の 3 条件は同値である。

- (1) $M'' = M.$
- (2) M は、 σ -strongly closed.
- (3) M は、weakly closed.

(ただし、記号 M' は、 $\{x \in B(H) \mid xy = yx, \quad \forall y \in M\}$ を表し、 M の commutant と言われる。) これらが満たされるとき、 M を von Neumann 環という。([KR] Section 5.3, [T1] Theorem II.3.9, [UHO] 定理 4.20.)

[3] (自己共役作用素のスペクトル分解) H 上の自己共役作用素 (self-adjoint operator) h (すなわち $h = h^*$) に対し、スペクトル測度 $\{E_\lambda\}$ が一意的存在して、 $h = \int_{-\infty}^{\infty} \lambda dE_\lambda$ と表せる。ただし、 E_λ は、 H 上の直交射影 (projection) の族であり、次の性質を満たすものである。 E_λ は spectral projection と呼ばれる。

- (1) $E_\lambda \leq E_\mu, \quad (\lambda < \mu).$
- (2) $\mu \downarrow \lambda$ のとき、 $\|E_\mu\xi - E_\lambda\xi\| \rightarrow 0, \quad \forall \xi \in H.$
- (3) $\lambda \downarrow -\infty$ のとき、 $\|E_\lambda\xi\| \rightarrow 0, \quad \forall \xi \in H.$
- (4) $\lambda \uparrow \infty$ のとき、 $\|E_\lambda\xi - \xi\| \rightarrow 0, \quad \forall \xi \in H.$

h が有界のときは、 h のスペクトルは有界区間 $[a, b]$ に含まれ、上の積分は \int_a^b で置き換えられる。

(これについては, さまざまな関数解析の本を見よ. たとえば「関数解析 III」(伊藤清三, 岩波講座基礎数学)の12章「関数解析」(黒田成俊, 共立数学講座15)の12章, “Functional Analysis” (K. Yosida, Springer)のChapter XI, “Functional Analysis” (W. Rudin, McGraw Hill) Theorem 13.30 など.)

[4] (自己共役作用素に対する functional calculus) 自己共役作用素 h に対し, h のスペクトル上の Borel 関数 f に対し, $f(h)$ が, $f(h) = \int_{-\infty}^{\infty} f(\lambda) dE_{\lambda}$ で定まる. f が有界関数であれば, $f(h)$ も有界作用素である.

(たとえば「関数解析 III」(伊藤清三, 岩波講座基礎数学)の11章4節「関数解析」(黒田成俊, 共立数学講座15)の12章5節 — ただし f が連続の場合のみ —, “Functional Analysis” (K. Yosida, Springer)のChapter XI, section 12 “Functional Analysis” (W. Rudin, McGraw Hill) Theorem 13.24 などを見よ.)

[5] (作用素の正值性) H 上の有界線型作用素 x について, 以下の条件は同値である. これらが満たされるとき, x は正であるといい, $x \geq 0$ と書く.

- (1) $(x\xi, \xi) \geq 0, \quad \forall \xi \in H.$
- (2) $x = x^*$ かつ x のスペクトルは $[0, \infty)$ に含まれる.
- (3) $x = y^*y$ なる $y \in B(H)$ が存在する.

([T1] Theorem I.6.1, “Functional Analysis” (W. Rudin, McGraw Hill) Theorems 12.32, 12.33.)

自己共役作用素 x, y に対し, $x - y \geq 0$ のとき, $x \geq y$ とかく. このとき, 任意の $z \in B(H)$ に対し, $z^*xz \geq z^*yz$ である.

[6] von Neumann 環 M の任意の元は, M 内の unitary 4 個の 1 次結合で書ける ($u \in B(H)$ が unitary とは, $u^*u = uu^* = 1$ を満たすことである. $u^*u = 1$ だけなら isometry と言われる.) ([T1] Proposition I.4.9, [UHO] 補題 3.18.) この事と, [3] の一意性より, $h \in M$ の時, h のスペクトル分解に現われる spectral projection E_{λ} は M に属することがわかる.

[7] (極分解, polar decomposition) $x \in B(H)$ に対し, $x = u|x|$ という極分解ができる. ここで, $|x| = (x^*x)^{1/2}$, u は $|x|\xi \mapsto x\xi$ で定まり, $\{|x|\xi\}^{\perp}$ 上で 0 となる partial isometry である (u が partial isometry であるとは, H_1 上で isometry, H_2 上で 0 となるような分解 $H = H_1 \oplus H_2$ が取れることである. u^*u, uu^* が projection であること, と言っても同じである.) x が von Neumann 環 M に属していれば上の $u, |x|$ も M に属している ([UHO] 定理 1.8, page 97.)

[8] (II_1 factor の定義と例)

行列環の増大列 $M_2(\mathbf{C}) \subset M_2(\mathbf{C}) \otimes M_2(\mathbf{C}) \subset M_2(\mathbf{C}) \otimes M_2(\mathbf{C}) \otimes M_2(\mathbf{C}) \subset \dots$ を $x \mapsto x \otimes 1$ という埋込みで定める. また, $\tau(x)$ を行列としての $\text{Tr}(x)$ を x のサイズで割ったものと定めれば, この $\tau(x)$ は, 埋込みと compatible で, 増大列の union A 上の linear functional τ を定める. 次に, A 上の内積 $(x, y) = \tau(y^*x)$ によって, A を完備化した Hilbert 空間を $L^2(A)$ と書けば, A は $L^2(A)$ 上に, 左掛け算で作用する. この表現による A の像の弱閉包を M とおく. すると, M 上の, trace τ が $\tau(x) = (x\hat{1}, \hat{1})$ によって次の条件を満たすように定まる. ただし, $\hat{1}$ は, $1 \in A$ を $L^2(A)$ の元と見なしたものである. (これらの条件を満たす linear functional は, (normalized faithful normal) trace と言われる.)

- (1) $\tau(x^*x) \geq 0.$
- (2) $\tau(x^*x) = 0$ iff $x = 0.$

- (3) $\tau(xy) = \tau(yx)$.
 (4) $\tau(1) = 1$.
 (5) τ は, σ -weakly continuous.

また M 上の (1) ~ (5) を満たす linear functional は, 上で作った τ に限ることもわかる. このように, von Neumann 環 M 上に, trace が一意的存在するとき, M は II_1 factor と言われる. 一般に, II_1 factor M の center $M \cap M'$ は, \mathbb{C} である. また, この作り方では, M 内に, 有限次元環の増大列があり, その union は, weakly dense になっている. このような II_1 factor を AFD (approximately finite dimensional) と言う (この条件は, hyperfinite とも言われる.)

[9] (M 上の σ -weakly continuous functional の決定) von Neumann 環 M 上の σ -weakly (あるいは σ -strongly) continuous な linear functional φ は, $\xi, \eta_n \in H$ で $\sum_{n=1}^{\infty} \|\xi_n\|^2 < \infty$, $\sum_{n=1}^{\infty} \|\eta_n\|^2 < \infty$ となるものにより, $\varphi(x) = \sum_{n=1}^{\infty} (x\xi_n, \eta_n)$ と表される. ([T1] Theorem II.2.6, [UHO] 定理 4.6.)

[10] (trace class operator) $B(H)$ の元 x に対し, $\text{Tr}(|x|) = \sum_{n=1}^{\infty} (|x|\xi_n, \xi_n)$ とおく. ここで, $\{\xi_n\}_n$ は H の完全正規直交系であり, 右辺は, $\{\xi_n\}_n$ の取り方にはよらない. この値が有限であるとき, x は trace class であるといわれ, $\text{Tr}(x) = \sum_{n=1}^{\infty} (x\xi_n, \xi_n)$ も定まる. Trace class であるような x に対し, $\|x\|_1 = \text{Tr}(|x|)$ とおくと, trace class operator 全体は, この norm で Banach 空間 $T(H)$ になる. これは, H 上の compact operator 全体 $K(H)$ の dual space であり, $T(H)$ の dual space は, $B(H)$ となる ([T1] Chapter II, Section 1, [UHO] 2 章 4 節, 定理 2.18, 2.20.)

[11] (Hahn-Banach の定理の幾何学形)

K を実 norm 空間 X の閉凸集合とし, $x_0 \notin K$ とする. このとき $f \in X^*$ が存在して, $\sup_{x \in K} f(x) < f(x_0)$ となる.

たとえば「関数解析 II」(藤田宏, 伊藤清三, 岩波基礎数学講座) 定理 8.16, “Functional Analysis” (W. Rudin, McGraw Hill) Theorem 3.4 などを見よ.

[12] (Banach-Alaoglu の定理) Norm 空間 X の dual space X^* の単位球は weak * compact である.

たとえば “Functional Analysis” (W. Rudin, McGraw Hill) Theorem 3.15 を見よ.

[13] (predual) von Neumann 環 M に対し, M 上, ultraweakly continuous な linear functional 全体を M_* と書く. するとこれは Banach 空間になり, $(M_*)^* = M$ である. また, M の σ -weak topology は, $(M_*)^*$ としての weak * topology に一致する ([T1] Chapter III, Section 2, [UHO] 定理 4.10.)

[14] (Kaplansky の density theorem) M を $B(H)$ の *-部分環とする. x が M の弱閉包に入っていれば, M 内の net x_i で, $\|x_i\| \leq \|x\|$, $x_i \rightarrow x$ (strongly) となるものが存在する. ([T1] Theorem II.4.8, [UHO] 定理 4.22.)

[15] (GNS-表現) II_1 factor M とその上の trace τ を取る. M の $L^2(M, \tau)$ 上への表現 π が作れ, $\pi(M)$ は von Neumann 環となり, π, π^{-1} は, ともに σ -weakly continuous となる. ([T1] Theorem I.9.14, Corollary 3.10.)

[16] (Radon-Nikodym 型定理) II_1 factor M とその上の trace τ , $\varphi \in M_*$ に対し, $\varphi(x^*x) \leq \tau(x^*x)$ がすべての $x \in M$ に対して成り立てば, $0 \leq a \leq 1$ を満たす $a \in M$ が存在して, $\varphi(x) = \tau(ax)$ と書ける ([UHO] 定理 6.7.)

[17] (II_1 factor における projection の比較) II_1 factor M とその上の trace τ を取る . M 内の projection e, f に対し , $u^*u = e, uu^* = f$ となる partial isometry u が M 内にとれるとき , $e \sim f$ と書く . これは , 同値関係である . また , $e \sim f_1, f_1 \leq f$ となる projection $f \in M$ が取れるとき , $e \prec f$ と書く . $e \prec f, f \prec e$ であれば , $e \sim f$ である ([T1] Proposition V.1.3, [UHO] 定理 4.41.) 任意の projection $e, f \in M$ に対し , 以下の 3 つのうちの一つが成り立つ .

- (1) $e \prec f, e \not\sim f$.
- (2) $e \sim f$.
- (3) $f \prec e, e \not\sim f$.

また , 上の (1), (2), (3) は , それぞれ $\tau(e) < \tau(f), \tau(e) = \tau(f), \tau(e) > \tau(f)$ と同値である ([T1] Chapter V, Sections 1,2, [UHO] 定理 4.45.)

[18] (conditional expectation) II_1 factor M とその上の trace τ , M の部分 von Neumann 環 N に対し , conditional expectation と呼ばれる M から N への次の条件を満たす線型写像が一意的に存在する .

- (1) $\tau(xy) = \tau(E(x)y), \quad x \in M, y \in N.$
- (2) $E(x^*x) \geq 0, \quad x \in M.$
- (3) $E(axb) = aE(x)b, \quad a, b \in N, x \in M.$
- (4) E は , σ -weakly continuous.

([T1] Proposition V.2.36, [UHO] 定理 6.24.)

[19] II_1 factor M とその von Neumann 部分環 N , $x \in M$ に対し , $K(x)$ を $\{uxu^* \mid u \text{ は } N \text{ の unitary}\}$ とし , さらに $\tilde{K}(x)$ をその σ -weak closure とする . すると , $\tilde{K}(x) \cap N' \cap M = E_{N' \cap M}(x)$ である ([T2] 補題 VII.2.5.)

作用素環論の一般的教科書

- [BR] O. Bratteli & D. W. Robinson, Operator algebras and quantum statistical mechanics I, II, Springer, 1979.
- [D1] J. Dixmier, Les C^* -algèbres et leurs représentations, Gauthier-Villars, 1969.
- [D2] J. Dixmier, Les algèbres d'opérateurs dans l'espace Hilbertien, Gauthier-Villars, 1969.
- [KR] R. Kadison & J. Ringrose, Fundamentals of the theory of operator algebras I, II, Academic Press, 1986.
- [P] G. K. Pedersen, C^* -algebras and their automorphism groups, London Mathematical Society Monographs, Vol. 14, Academic Press, London, 1979.
- [S] S. Sakai, C^* -algebras and W^* -algebras, Springer Verlag, 1971.
- [St] Ş. Strătilă, Modular Theory in Operator Algebras, Editura Academiei and Abacus Press, Tunbridge Wells, 1981.
- [SZ] Ş. Strătilă & L. Zsidó, Lectures on von Neumann algebras, Editura Academiei and Abacus Press, Tunbridge Wells, 1979.
- [T1] M. Takesaki, Theory of operator algebras I, Springer, Berlin, 1979.
- [T2] M. Takesaki, 作用素環の構造, 岩波書店, 1983.
- [T3] M. Takesaki, Theory of operator algebras II, Springer, in preparation.
- [UOH] H. Umegaki, M. Ohya, & F. Hiai, 作用素代数入門, 共立出版, 1985.